TDA News Letter　Vol.34

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構　けいかん・きこう　http://www.tda-j.or.jp

2016-09-01

目次

□P 1
「“かたち”を超えた街を目指して」
／（文）曽根 幸一
□P 2～3
TDA NEWS 1
＜幕張ベイタウンまち歩き＞
「壮大な都市デザインの実験としての幕張ベイタウン」　／倉田 直道
「一緒に創る」　／金丸 宜弘
「パティオのある街」　／高橋 徹
「幕張ベイタウンの今を見て感じた事」
／中須 啓介
「幕張ベイタウンを訪れて」／平野 周
□P 4～5
TDA NEWS 2
＜第 4 回景観デザイン交流会＞
「屋外広告物がつくる景観についての報告と検討」　／吉田 愼悟
「新宿区における景観・屋外広告物の取り組みについて」　／中山 祐一
「川崎市の景観施策における広告物等に係る取組」　／吉原 秀和
「景観を共に考える応援者として」
／竹内 誠
「気づきを生み出す景観事前協議」
／金田 享子
□P 4～5
ランドスケープ事情
「『景観』を作る『連なり』への視座」
／金子 祐介
□P 6
シリーズ：地域から
「栃木市」その 1　／大波 龍郷
□P 6
景観ビジネス最前線　／㈱コトブキ
□P 6
ホワイトボード

写真：㈱エスエス　横瀬博一

“かたち”を超えた街を目指して

幕張ベイタウンの構想が始まったのは、都心回帰のかけ声とともに計画された大川端のリバーシテイ 21 なる超高層群が着手した頃だったから、今考えると四半世紀以上さかのぼる。新都心住宅として非団地型、非超高層型という新しい路線を渇望していたのは、ほかならぬ地権者の千葉県企業庁の皆さんである。以来学者や識者など多くの会議が重ねられていくのだが、戦後のハビタッドの経緯を考えれば、西欧では当たり前である街区型に話が絞られてくる。沿道性という言葉は理解頂いたが、平坦な土地での計画都市だから、効率や能率を求めれば平板で凡庸な街になりかねない。これに複雑系のデザイン、つまり形や色だけでなく音や匂いまで感じそうな景観をどう演出していくか。都市デザインのガイドラインはそうした気運の中で模索した結果であった。複合性、開放性、場所性などのコンセプトをもとに絵入の冊子が出来上がると同時に、7 つの事業者複合体のそれぞれに計画設計調整者という私たち世代の都市計画コンサルや建築家がついた。街区は千鳥状に配分することで同じ事業者が隣り合うことを避けている。建築家は複数であること。住棟は分節すべきこと。地上、中間、屋上の三層構成を守ること。特異な景観点の要請。色彩は自由に。などなど。以来完成まで都市デザインガイドラインは効力のある手引きになった。要は事業者と多くの設計者に、単純になりがちな体制を避け、計画と設計の過程で熟議のプロセスを体験頂いたことになる。十数年間のワークショップだけでも 100 回をゆうに超えている。建て売りという構図の中で計画を考えることは、自然都市に如何に近づけられるかも大きな課題である。線路を越えた北側の若葉地区がどんな街になるのか？　長きにわたってこの街と付き合ってきた私たちは、今度はみまもる立場である。

芝浦工業大学名誉教授／ TDA 顧問　曽根 幸一

TDA NEWS 1

TDA まち歩きイベント
『幕張ベイタウンの今』詳報

1 壮大な都市デザインの実験としての幕張ベイタウン

倉田 直道
工学院大学名誉教授
／TDA 副代表理事

幕張ベイタウンは、壮大な都市デザインの実験である。建物の建設という意味では既に完成しているが、街という意味では、未だ実験は継続中である。今回のまち歩きは、その壮大な実験の道半ばではあるがその成果を確認する良い機会となった。

我が国での多くの住宅団地開発では、特定の計画者･設計者が都市の全体像を描き、かつ建物も類似のデザインを繰り返すことにより、均質でこれといった特徴のない街を生み出してきた。それに対して、幕張ベイタウンは全体の調和を尊重しつつも多様性のある街を目指し、デザインガイドラインを設け、それに基づくデザイン調整と誘導を図ることで調和と一体感を担保し、複数の建築家の登用により様々な発想や創意工夫を引き出すことで多様性を実現しようとしてきた。開発当初は、デザインガイドラインの厳格な運用が図られたようであるが、プロジェクトの進行に伴いより柔軟な調整と誘導が図られるようになったと聞いている。建物の完成時における印象として、個々の建物デザインに優劣はあるように思われるが、街全体としては、ある質的な幅の中で、調和と多様性が実現しているように思われ、マスタープランやガイドラインに加え、計画デザイン会議のような会議体による柔軟な調整・誘導の仕組みが街をデザインする方法として有効であることを実証している。今後の開発やまちづくりに対する教訓として、そのプロセスがどのように成果に繋がったか、検証をして欲しい。

次の関心は、都市デザインを通して住宅都市における暮らし（ライフスタイル）やコミュニティをデザインするということはできるのか、という点である。幕張ベイタウンでは、そのような意図のもとで、街区の配置やデザイン、公共施設の計画・デザインなどがなされている。そのうち、ベイタウンコアや小中学校は、利用者の思いを反映した設計が行われたこともあり、コミュニティ醸成の場となっていることが確認できる。一方で、街区内中庭の利活用は、街区により温度差があり、街区におけるコミュニティ意識の度合いがその利用に現れているように思える。また、建物低層階における商業施設等の立地も、計画当初の思惑ほどは進んでいない印象がある。これもこうした施設を支える住民のライフスタイルと密接な関係にあり、土地利用などの計画コンセプトとしては適切であっても、住民のライフスタイルがそれに追いついていない現実でもあるように思われる。

設計者の手を離れてからも街は存在し続ける。街の持続性や街の成熟化に対して、街を使う住民が主体となった街のマネジメントが大きな役割を果たすことになるように思われ、継続する都市デザインの壮大な実験のこれからの大きな課題であろう。

2 一緒に創る

金丸 宜弘
㈱環境設計研究所 代表
／TDA 正会員

ベイタウンを訪れる回数は、もうどのくらいになるだろうかと考えながら、海浜幕張駅発のバスに揺られ「街のコア」までやってきた。本日は TDA のまち歩きイベントである。私とベイタウンの縁は、我が師である曽根幸一さんに連れられて初めてプロジェクト会議に参加した平成元年あたりから始まる。当時、土地所有者である千葉県企業庁は、新都心にふさわしい未来型の住宅地をつくろうと考えていた。このため、とりわけ「都市デザイン」に注力し、新たな景観を創り出すため、さまざまな検討を行った。運良く私もそのお手伝いの一端を担わせてもらえたのである。初めて現地を目にした印象は、草茫々の広大な土地とその彼方に見える京葉線の高架以外に何もなく、今の「街」とはほど遠い風景であった。

ベイタウンのプロジェクトは「団地ではなく街をつくる」ことを標榜し、その考え方を私なりに易しく表現すれば、それは『一緒に創る』というものであった。例えば、ここでは住棟等の建物は道路に沿って配置する「沿道型配置」を原則としている。これは建物と街路を『一緒に創る』ことにより、より密実な公共空間を生み出そうとする試みである。まち歩きに参加した方の中で街区や道路の境界線がどこにあったかどれくらいの方が記憶しているだろうか。写真のように道路と民地のデザインを調整し『一緒に創る』ことで煩わしい管理区分境界線を目立たせない公共空間デザインを実現した。また、「モノ」だけでなく、「ヒト」についても『一緒に創る』仕掛けがされた。それが企業庁を中心に民間開発事業者とともに都市計画・建築の専門家等で構成された会議体の設置であった。とくに都市デザインについては企業庁と複数の専門家を中心とした計画デザイン会議・ワークショップが長年にわたり、100 回を超えて開催され様々な議論が交わされた。若い頃からこの会議等を経験できた私は素晴らしい勉強の機会を得られたことに感謝するとともに、「街」をつくるためには膨大なエネルギーが必要であることを痛感できたのである。

ベイタウンの開発がほぼ終わる二年ほど前から、私はベイタウンの住民によるまちづくり組織である、ベイタウン協議会・景観委員会にアドバイザーとして参加している。ここに居住する住民は、「住宅だけでなく外の環境が気に入ったから住むことを決めた。」と公言される方々も多く、まちづくりとともに「街の景観」への意識は極めて高い。街開きから数えてすでに 20 年以上が経った今、この「街」を次代につなぐことへの住民の危機感は高まっている。このため専門家としての私の役割は、ベイタウンの景観が民地の建築物だけでなく道路や公園等の公共用地と『一緒に創る』ことで成り立っている原則を説き続けるとともに、持続的なまちづくりをめざし公共用地管理者である千葉市も巻き込みながら、これからのベイタウンにおける『一緒に創る』を考えることにあると感じている。

3 パティオのある街

高橋 徹
クリエイティブ スタジオ 代表
／TDA 副代表理事

新しい都心型住宅を目指して、我が国の多くのトッププランナー、アーキテクトが主体的に関わったプロジェクトと街。計画の意図と入居 20 年経った実際を地元の方から説明を頂き、楽しく見て歩きました。街全体はパティオスと称した中層のセンター地区から周辺の高層ゾーンと広がりましたが、それぞれの建物や街区はデザイン的にも一工夫され、街全体の個性やプライドが感じられました。

街の最大の売り物は中庭（パティオ）と思い、特にそこに注目して見て回りました。11 街区の中庭、広く張られた水面に逆さに写り込まれる建物のファサードは、そのままで都市の街並みの風景となっていました。このような風景や庭づくりの基本でもある借景的技法が設計者の意図であったかどうかは判りませんが大いに感心しました。この他、5 番街での固い石の舗装に対比して風になびくような竹の群生を施したアーバンらしさの演出、15 番街での人工地盤の上に樹林とベンチを持った腰壁を廻らし都市の中のオアシスづくり、それぞれ都市の中での風景づくりに工夫が払われていました。

パティオは基本的には居住者優先ないし専用の空間です。そのためか、通りからはあまりその存在を感じられません。折角の価値を有するパティオですから通りの回廊（ポルティコ）とつながって見え隠れしながら、その付加価値がもっと発揮されても良いのかなとも思いました。

また、ベイタウンは様々な外壁のカラーがあふれる街です。街区内のカラーコントロールはしっかり行われている街区もあり、街の色の勉強になる街です。携帯の普及により殆ど無用になった電話ボックスはこれからどのように使われるのか、LED 化によってデザインが変った街路灯など時代とともに街の景観の変化も見られます。

4 幕張ベイタウンの今を見て感じた事

中須 啓介
昭和㈱ 開発事業部
市街地整備室 副主任

当日は、ベイタウン内にある打瀬小学校、美浜打瀬小学校で運動会が開催されていました。この小学校は敷地を塀で囲われておらず、公園の様な街に開放的な造りであり、文字通り子供たちの活気がまちに溢れて、通りを歩く私にも伝わってきました。

ベイタウン内全域ではありませんが、敷地から電柱の無い歩道から車道まで、段差なくフラットな構成であることが、まちの一体感を生み出している一つの要素なのかと思います。このように通りと敷地に大きな隔たりが無く連続性のある構成は、小学校や公園といった公共公益的な街区だけでなく、住宅街区でも沿道中庭型という形で街路空間とのつながりを作っています。また、パティオス（住棟）は、都市デザインガイドラインに基づいて街区ごとのコンセプトで建てられ、外観は西欧風の街並みを形成している一方で、建物内にはごみ空気輸送システムといった高品質な設備が設置されおり、これらは幕張ベイタウンの特徴であると思います。

西欧風の景観、ゴミ空気輸送システムや石畳の街路といった高品質なインフラ、オープンな学校や公園、パティオスごとで定期的に開催されるイベント等の住民活動、これらの幕張ベイタウンの特徴が、地域ブランドとして住民の意識の中にあるのではないかと思いました。

これまではベイタウンブランドを維持しながら段階的な住棟街区を整備してきたことで、偏りのない住民の年齢構成を保っているようですが、開発計画も終わりを迎え、定期的に新しい入居者が増えることなく、高齢化に向かうことが予想されます。さらに管理運営主体も住民組織の協議会へ移った中で、ベイタウンブランドをどのように維持していくのか、または別の方向へシフトしていくのか、注目していきたいと思いました。

5 幕張ベイタウンを訪れて

平野 周
昭和㈱ 技術事業部
区画整理調査室

幕張ベイタウンが都市デザインにおいて、高い評価を得ていることは、知っていたので、まち歩きの日をとても楽しみにしていた。

歩いてみると噂の通り素晴らしい街並みが広がっていた。高さの揃った集合住宅が建ち、石畳で舗装された街路の脇には、縦列駐車した車が並び、まるで日本では無く海外の街に来た気分になってしまった。

建物のデザインについては、どの建物も淡いトーンの色を採用し、街路に面して四角い窓を配置していた。石畳の街路も建物のトーンに合わせ、街全体に統一感を持たせていることが強く伝わってきた。石畳の街路の修復には、既存と同じ材料を使っており、良好な街並みを維持することへの真摯な思いが伝わってきた。

今回のまち歩きでは、幕張ベイタウンのプロジェクトに実際に関わった方々から当時のお話を聞くことができた。現在の幕張ベイタウンがあるのは、このプロジェクトに関わった方々が、良い街を創りたいと言う熱い思いを持ってプロジェクトを進めたからこそだと感じた。最近では住民が主体的に、パティオでのイベント開催、まちづくり協議会の発足、公園の自主管理・運営等、幕張ベイタウンの魅力向上に繋がる活動をしているそうだ。街に対する熱い思いは、幕張ベイタウンをデザインした方々から、住民に引き継がれているようである。

昨今、“オールドタウン”と揶揄される“ニュータウン”と言う名の住宅団地では、高齢化や建物の老朽化等の問題に直面しているが、それは 20 年、30 年後の幕張ベイタウンで起きてもおかしくない話である。しかし、この良好な街並みと住民の主体的な活動が維持できれば、いつまでも人々を引きつける魅力的な街であり続けると私は思っている。幕張ベイタウンの動きに今後も注目していきたい。

TDA NEWS 2

TDA 交流イベント
『景観デザイン交流会』詳報

1 屋外広告物がつくる景観についての報告と検討

吉田 愼悟
武蔵野美術大学教授
／色彩計画家／ TDA 理事

6 月 21 日、浅草文化観光センターで「屋外広告物とデザインレビュー・東京都の景観行政の動向」と題し、景観デザイン交流会（「景観アドバーザー交流会」改め）が開催された。この交流会は自治体と景観アドバイザー等を務める都市デザイナーの交流を図るために行われてきたが、今回は特に屋外広告物のあり方について自治体と都市デザイナーが参加し、検討を行った。

交流会の 1 部で「東京都における景観行政の取り組みと課題」と題して、東京都の景観担当課長の高野琢央氏が講演し、2 部では新宿区のアドバイザーの竹内誠氏から「屋外広告物の景観誘導」、そして川崎市の担当課長の吉原秀和氏から「景観計画における屋外広告物」の事例報告があった。そして 3 部では TDA 副代表理事の倉田直道が司会を務め、東京都の高野氏、新宿区の吉原氏、アドバイザーの竹内氏と金田亨子氏、さらに TDA から吉田愼悟が登壇して、屋外広告物のあり方に関してパネルディスカッションが行われた。

2 新宿区における景観・屋外広告物の取り組みについて

中山 祐一
新宿区都市計画部
景観・まちづくり課長

新宿区は、平成 27 年 3 月に「新宿区景観形成ガイドライン」を改定し、新たに「屋外広告物に関する景観形成ガイドライン」を策定しました。現在、このガイドラインを活用しながら、新宿区にふさわしい屋外広告物の景観形成に取り組んでいます。

また、平成 27 年 6 月 1 日からは屋外広告物に関する景観事前協議を開始し、周辺環境や建築物などに対する景観的配慮について、景観まちづくり相談員の技術援助を受けながら、きめ細やかな景観誘導を行っています。平成 27 年度の協議件数は 130 件でしたが、平成 28 年度は 8 月 10 日現在で 78 件となるなど、制度として十分に周知されてきた印象を受けています。

良好な景観を形成することは、区民にとって潤いのある豊かな生活環境を創造するだけでなく、人の心を豊かにし、更には地域の活性化や観光の振興にも大きく貢献していきます。新宿区は、今後も地域の個性に光をあてた景観まちづくりを推進していきます。

右：屋外広告物に関する景観形成ガイドライン

3 川崎市の景観施策における広告物等に係る取組

吉原 秀和
川崎市まちづくり局計画部
景観担当課長

■歩み　川崎市の景観行政は、昭和 50 年代に策定した「川崎市都心アーバンデザイン基本計画」を端緒に、現在の景観計画に至る。広告物等については、屋外広告物法との役割分担の下、同法適用外の窓裏広告物等も対象に、景観阻害要因たる側面に着目した規制誘導を行っている。具体的基準は、都市拠点周辺を指定した景観計画特定地区等、景観形成上重要な地区において、社会背景や地域特性を踏まえ、定めている。

■課題　基準が詳細な故、職員による審査に際し基準適合の判断のみに捉われる懸念がある。良質なデザインを誘導するための審査手法等の再構築が必要と考える。

■展望　▼賑わいの演出、ブランディングツールとしての広告物等の評価と誘導▼ネーミングライツによる施設名称等表示のルール化▼デジタルサイネージ等多様化する映像媒体に対する弾力的運用、などの社会的要請に対応した、良好な景観形成を誘導する新たな課題への取組を進めていく。

良質なデザイン誘導が行われている新百合ヶ丘駅周辺地区

ランドスケープ事情

『景観』を作る『連なり』への視座 ～『景観』と人を言葉で繋げていく作業～

景観デザインマップ東京シリーズ『景観デザインマップ千代田』と『景観デザインマップ品川』

金原水門を対岸から臨む。現在は浜松市天竜区にある熊（くんま）村に向かう道路と一体化している。

私は、浜松に住み専門学校で講師をする傍ら、月に一～二回『景観デザインマップ東京』を制作するため東京に足を運ぶ生活を行っている。この生活も二年目に入った。おかげで、東京（首都）の景観と浜松（地方の中心都市）の景観を見比べ、互いに何がその土地固有の景観を作っているのかがわかってきたように思う。

では、「浜松を代表する景観とは何か？」と聞かれると未だ答えにつまる。そこで、浜松のいい景観に賞を与えている「はままつ広告景観賞」の審査結果を元に、その選定先を見て回ることにした。ただ、景観の頭に「広告」とついているからか、私が思い描いている『景観』とは異なり、単体のサイン計画や民活で保存された歴史的な建築が多いことに気付いた。審査委員が「選定したサインや建築を起爆剤に街並を作っていきましょう」ということが目的なのかもしれないが、「『景観』とは何か？」が問われないままに、景観風のものが評価されているのが現状のようだ。決して審査員を批判しているのではなく、ある側面であるにしても、景観が商業的なものとしてプロにも理解され利用されている現実があるということだ。

だからといって、浜松に、皆さんに紹介したい『景観』がないわけではない。例えば、天竜川に今でも残る天竜美林と一体となった土木景観。その遺構から、浜松の農業を支える水瓶を管理する金原水門の歴史がうかがえる。また、その森林を自ら植樹し作り上げた

4 景観を共に考える応援者として

竹内 誠
㈱竹内デザイン 代表取締役
／SDA 副会長

新宿区の景観まちづくり相談員として、屋外広告物の景観協議に携わっている。協議に来る方のほとんどが施工会社の担当者。「すでに施主が決定したデザインは変更できない。また、変更する時間もない。」と口を揃える。対して「この広告物を見る人たちにどんな印象を与えたいのか、ここの景観がどうあることがふさわしいのか、一緒に考えましょう」とこちらからは言っている。施工者は専門家として、景観との調和を図る知識を持ち、代理店や施主を指導する立場にあってほしい。その行為を「新宿区は応援している」ということを伝えていきたい。効果はまだまだ先だが、これまで施主、デザイナー、施工者がともに来庁して、熱っぽく新しい屋外広告について説明されたものもあった。四ッ谷駅から見える「綿半」の屋上広告は、この地にあって実に魅力的な屋外広告となっている。頭ごなしの規制ではなく、その場の景観を共に考えることが必要なのだと確信している。

5 気づきを生み出す景観事前協議

金田 享子
アトリエ景㈱ 代表

新宿区の屋外広告物の事前協議を始めて概ね１年が過ぎた。持ち込まれる届出には、「目立てばよし」、「広告主の要望のまま図面化したらこうなりました」的なものが少なからず存在する。自ずと周囲との景観についても無頓着である。そういった事案に対して、特に対面協議では、何を伝えたいか、伝えるためにはどういう作法があるか、景観とのあり方をどう考えるかなど、解きほぐすような会話をすることで、広告物の有り様を見直していただけることも多い。協議の過程で事業者と広告主の関係性に思わぬ風穴を開け、広告物に対する視点や景観との関わりといった気づきをもたらすこともある。また我々アドバイザー側が、斬新な試みに感嘆したり、法条令上の課題を見いだすことも少なくない。

今後も紋切り型の協議ではなく、お互いが地域や景観の魅力と屋外広告物のポテンシャルに気づくような会話を積み重ねていきたい。

街路の景観に影響するイベント用のバナーも協議対象

TDA企画

日韓都市デザイン交流会

貴方の目と耳で、韓国の景観デザインの最先端を知る！！

昨年、TDA 主催で、韓国と日本の都市デザイナーが集まり「韓日都市デザイン交流会 2015」が開催されました。
今年は日本側が韓国を訪れ、韓国の始興（シフン）市と世界遺産のまち水原（スウォン）市を視察し、日韓の都市デザインについて検討する「日韓都市デザイン交流会 2016」を開催します。

■コア日程（予定）

2016 年 10 月 7 日㈮～ 10 月 9 日㈰

●10 月 7 日　シフン視察と交流会
金浦国際空港集合（12：00）
バスにてシフン市へ移動しながら視察
夕方より交流会（シフン泊）

●10 月 8 日　スウォン視察と交流会
午前・スウォン視察
午後・交流会（スウォン泊）

●10 月 9 日　解散

※10/7･8 の宿泊は韓国側が手配。それ以外の宿泊及び航空券は各自手配。
◆交流会では、TDA メンバー他による事例報告等が予定されています。
◆申込・お問い合わせ
TDA 事務局：main@tda-j.or.jp
※韓国側の準備もありますので、参加申込はお早めにお願いいたします。

学校法人笹田学園専任講師／ TDA 正会員　金子 祐介

金原水門の対岸に残る筏問屋・田代家。金原水門通水 (1946 年) 以前の景観を知る資料が多く残る。

通称「暴れ天竜」で行われていた筏による材木運びの様子。当時は木造の歩道橋も架かっていた。

金原明善の偉業が『景観』を構成する要素として残っているところが素晴らしい。既に、道路の橋桁と一体化してしまいアノニマスなデザインへと昇華され歴史の重みが消えつつある。ただ、そうした個人の功績がカタチとして『景観』の中に、残っていることは評価すべきこととして、今後も語り継いでいってもらいたいものだ。

話しは戻るが、「景観とは何か？」。私の理解だが、「『景観』とは、自然や建築、土木構造物などが、日常の生活の中において心地よい『連なり』として視覚的に見えること」だと思っている。商業的に突飛な形態や色を使い、視覚的に目立つものが良いというわけではない。だからといって、一様に商業的な景観を構成する要素を批判しているわけでもない。デザインの背景にある社会からの要請と作り上げられたデザインが構成している『景観』がどのような『連なり』をもっているのかが明快になれば良いのだ。

最後になるが、『景観』を作る『連なり』は大小様々あり多くのメディアで紹介されている。ただ、建築やデザインを紹介している一般誌の大部分が、日常の生活の中にある『景観』を描いてはいない。つまり、景観風なのだ。それでは、建築やデザインといった「閉じた世界の歴史」になってしまう。そうではなく、建築やデザインの歴史が普通の人に「開かれた歴史」になっていくためにも、多様な生活に寄り添ったかたちで『景観』の調査を行い紹介していこうと思う。

地域からの活動報告 **シリーズ：地域から**

マチナカプロジェクト代表　**大波 龍郷**

「栃木市」その1

蔵の街を生活資源・教育資源に

蔵の街でロケーション撮影

とちぎ高校生蔵部の活動

栃木市は、栃木県の南部に位置する人口16万人の地方都市である。市の北西部に連なる山々の麓では、麻や石灰の生産、瓦の製造など特色ある産業が根づいた。南部にかけて平地と湿地が広がり、酒・味噌などの醸造、箒・下駄の製造のほか、菅笠・ヨシズの製造や漁業など湿地ならではの生業も営まれた。多様な産地に囲まれた栃木のまちは、巴波川の舟運による江戸との交易で栄え、蔵造りの店舗（見世蔵）や土蔵が建ち並ぶ町並みが形成された。また、京都より派遣される日光例幣使が通る街道の宿場町としても整備された。数多くの問屋が軒を連ね、商人のまちとして経済・文化が栄えた栃木には、明治17年まで県庁が置かれた。今もその名残である県庁堀が流れ、旧町役場庁舎をはじめとする洋風建築も散見される。水の流れとともに、時代が織り交ざった町並みが魅力である。

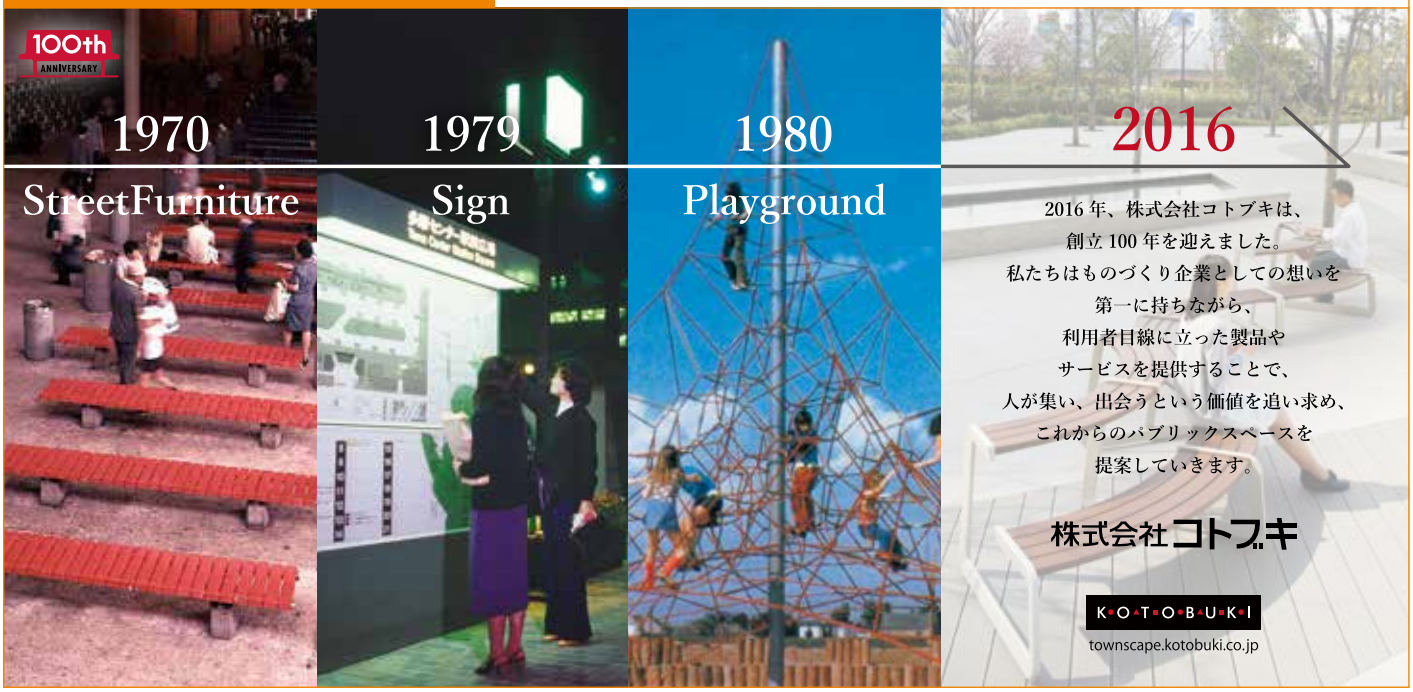
こうした町並みを保全するため、市は平成2年よりアーケードの撤去や電線を地中化する修景事業を行い、「蔵の街」を観光資源とするまちづくりを進めてきた。そして近年は、住民の高齢化、空き家の増加が顕著となり、空き家バンクや古民家を活用した滞在施設の運営など定住促進に力を入れている。

私たちは、栃木らしい空間やロケーションを生活資源として身近に楽しめる場や機会をつくるべく、平成23年から活動している。所有者が高齢で維持管理に手がまわらない建物や空き家を、一時的に使いながら掃除を行うことからはじまり、同じように建物を使ってみたい若いユーザーが徐々に集まるようになり、ポップアップショップやイベント等で活用するコーディネートを担うようになった。また、東京と行き来しやすいことから、二拠点で働くデザイナーやフォトグラファーと協業し、栃木らしいロケーションでの記念撮影の企画なども行っている。

私は栃木市の出身ではないが、高校通学で毎日のように町並みを見て魅力を感じるようになった。市内には9つの高校と高等部があり、約6,500人の高校生が通学している。市の事業をきっかけに集まった高校生たちの依頼でまち歩きを行い、まちづくりに興味をもった有志が「とちぎ高校生蔵部」を平成26年に設立した。空き蔵を活用したイベントの企画、学生向けのガイドマップの作成など、高校生とまちをつなぐ取組を広げている。

このまちに、仕事と暮らしを楽しむ若い世代が集う価値をつくると同時に、「蔵の街」を教育資源と捉え、高校生が遊び学べるまちにしたい。次回は、その拠点づくりについて紹介する。

景観ビジネス最前線



ホワイトボード

今号掲載の幕張街歩きは、デザインガイドラインで整えられた“街の今”から市民と専門家がどのような活動でそれを高めようとしているかを知ろうとする試み。もう一方の景観デザイン交流会は既存の街で専門家がどのような役割を果たすことができるか探ろうとするもの。ともによりよい景観を創造しようとする方たちにおおくの示唆を与えていると思う。さらに「地域から」は新シリーズで、栃木市での専門家の活動。景観を作り上げる活動の幅を感じる号になった。

TDA
TDA JAPAN

NPO法人 景観デザイン支援機構

〒 111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel：080-6722-4114　Fax：03-3847-3375　E-mail：main@tda-j.or.jp
http://www.tda-j.or.jp　https://www.facebook.com/tda.public

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
㈱昌平不動産総合研究所／㈱住軽日軽エンジニアリング／都市環境デザイン会議／㈱コトブキ／三井不動産㈱／㈱都市環境研究所／東京ガス用地開発㈱

［編集：㈱アーバンプランニングネットワーク］2016091000

頒価 ¥100